

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名

茨城県

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	波崎町立波崎第四中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	8	18
生徒数	61	63	77	(4)	205	

研究の概要

1. 研究主題

自ら学び、自ら考える生徒の育成  
- 個に応じた学習指導法の工夫を通して -

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- ・ 1年生・国語  
これまでの研究成果と生徒に対する実態調査の結果から、実施学年・教科の枠を広げ、研究に取り組むため。
- ・ 2年生・数学  
昨年度から研究を続けており、継続的に取り組んだ場合の生徒の変容を捉えるため。
- ・ 3年生・外国語(英語)  
これまでの研究成果と生徒に対する実態調査の結果から、実施学年・教科の枠を広げ、研究に取り組むため。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 自ら学び、自ら考える生徒の育成 - 個に応じた学習指導法の工夫を通して -</p> <p>研究の見通し(仮説) (1) 授業形態を工夫し個に応じた学習指導を展開することにより、意欲的に授業に取り組む態度が育成できるであろう。 (2) 到達目標を明確化し、生徒が自らの到達度を確認することにより、主体的に学習に取り組む自己学習力が身につくであろう。</p> <p>研究の内容・方法 (1) 授業形態の工夫 複数教員による指導の実施 2クラスを同じ時間に実施し、4名の教員で担当する。数学免許2名、免許外許可2名により授業形態の工夫が可能になった。 コース別学習について 单元ごとに、TTによる一斉指導を行い、練習の段階でコースを設定し、生徒が練習問題や小テスト等から学習到達度を計り、自己評価や学習課題、教師のアドバイスを参考にしてコースを自己選択して実施している。各コースの課題はそれぞれ「補充のための学習」「習熟のための学習」「定着、発展のための学習」とした。コース選択後のコースの変更も認めた。 その他の授業形態の工夫 学習到達度や生徒の反応等をもとに形成的評価を行い、習熟度別学習や少人数指導を実施した。習熟度減学習ではテストの結果や進度差等からクラスを分けて行った。また、少人数指導ではクラスを無作為に2分割して行った。</p>
--------	---

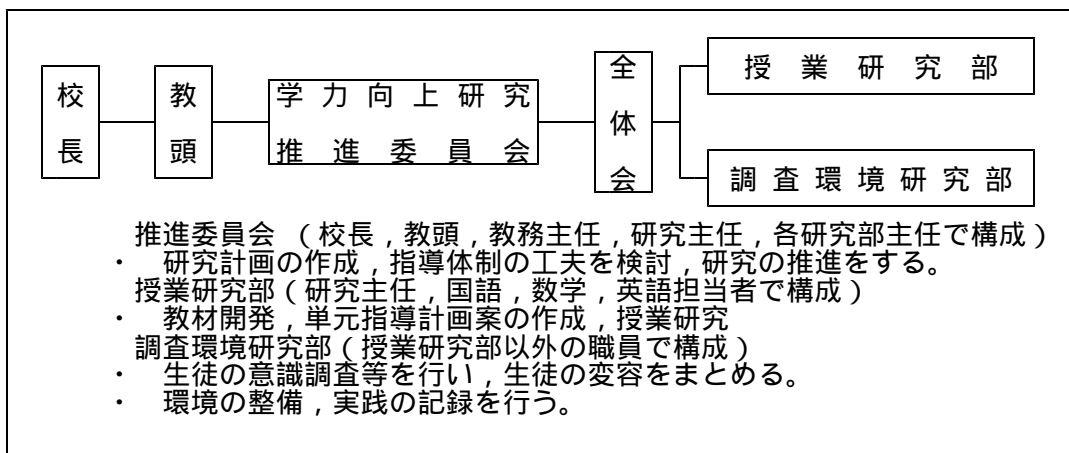
	<p>評価計画について まず、生徒の実績をテスト等（診断的評価）で調べ、必要に応じて、再指導や補充の学習を行う。到達度の判断は生徒が自ら学習カード（評価規準を分かりやすく示した学習カード）で判断したり、教師の助言を参考にして行った。補充的な学習は、単元の時間内に設定して行うが、授業時間以外にも生徒の希望に応じて、昼休みや放課後等に行う。その後、形成的評価で生徒の実態を把握し、コース別学習を行い、単元テスト等による総括的評価を行う。その後も、必要に応じて再指導を実施する。</p> <p>(2) 基礎・基本の明確化と定着 到達度学習カード 各教科で評価規準をもとに、単元ごとの学習目標や学習内容の具体的な到達目標を分かりやすく生徒に示し、学習活動の中で各自の到達度をいくつかの場面で自己評価できるように実施した。</p> <p>(3) 地域・家庭・小学校との連携 本校生徒は同学区にある1校の小学校を卒業した生徒だけで構成されており、地域・家庭も共通という環境にある。そのため小中合同で研究に取り組むことにより、縦断的な調査結果を得やすいことを活かし、以下の取組を行った。 ・小中合同の教育講演会による、学力向上フロンティアスクール事業の理解啓発 ・アンケート調査による地域、児童生徒の実態把握 ・小中合同推進協議会</p>
--	---

平成15年度	<p>テーマ 自ら学び、自ら考える生徒の育成 - 個に応じた学習指導法の工夫を通して -</p> <p>研究の見通し (1) 各教科で授業形態と工夫し、個に応じた学習指導を展開することにより、意欲的に授業に取り組む態度が育成できるであろう。 (2) 単元の評価規準をもとに、生徒が分かりやすい到達目標を設定し、学習カード等を通して生徒が自らの到達度を確認することにより、主体的に学習に取り組む自己学習力を育成できるだろう。</p> <p>研究の内容・方法 (1) 授業形態の工夫 国語科の取組 第1学年は2クラスを3コースに分けてコース別学習で実施した。コース選択の方法は、単元のはじめにコース選択のためのガイダンスで各コースの学習内容とコース選択のための判断の説明を行い、各コースの学習内容や、学習カードによる自己評価、これまでの学習での評価を判断の材料として生徒が自分でコースを選択する。コース選択できない生徒には個別にコース選択の助言を行った。当初はコース選択に迷う生徒も少なくなかったが、現在では生徒自身の判断で、自分に合ったコースを選択できるようになってきた。 数学科の取組 昨年度の研究では、単元の最後に補充、深化、発展の内容でコースを設定して実施した。本年度は学習方法別にコースを選択し、単元の最初にコースを分け、各自に合った学習方法で単元の学習内容を身に付けられるようにコースを設定して実施した。 外国語科（英語）の取組 外国語科では選択教科をコース別に分けて実施した。まず、選択教科ガイダンスで学習内容や学習方法の説明を行い、生徒自身の興味・関心などを判断の材料としてコース選択を行う。コース別学習では2つのコースが設定されており発展的な内容を学習するコースと基礎的・基本的な内容を学習するコースのどちらかを選択する。英文の構造を理解することが基礎・基本ではないのでそれぞれのコースで生徒の状況や学習内容によりALTが参加してTT指導を行う。</p> <p>(2) 基礎・基本の明確化と定着 到達度学習カード 各教科の評価規準をもとに、単元ごとの学習目標や学習内容の具</p>
--------	---

体的な到達目標を生徒に示し、学習活動の中で各自の学習到達度をいくつかの場面で自己評価できるように作成した。授業では単元の導入時に活用したり、授業のまとめや自己評価として活用した。また、コース別学習ではコース選択の手立てとしても活用した。

平成16年度	<p>テーマ 自ら学び、自ら考える生徒の育成 - 個に応じた学習指導法の工夫を通して -</p> <p>研究の見通し (1) 各教科で授業形態と工夫し、個に応じた学習指導を展開することにより、意欲的に授業に取り組む態度が育成できるであろう。 (2) 単元の評価規準をもとに、生徒が分かりやすい到達目標を設定し、学習カード等を通して生徒が自らの到達度を確認することにより、主体的に学習に取り組む自己学習力を育成できるだろう。</p> <p>研究の内容・方法 (1) 授業形態の工夫 一斉授業、TT指導、少人数指導等の個に応じた指導の工夫 授業形態の特長を生かす評価の工夫 (2) 基礎・基本の明確化と定着 学習カードの活用法や生徒の学力の評価を生かした指導の改善 家庭における学習方法の定着と自己学習力の育成</p>
--------	---

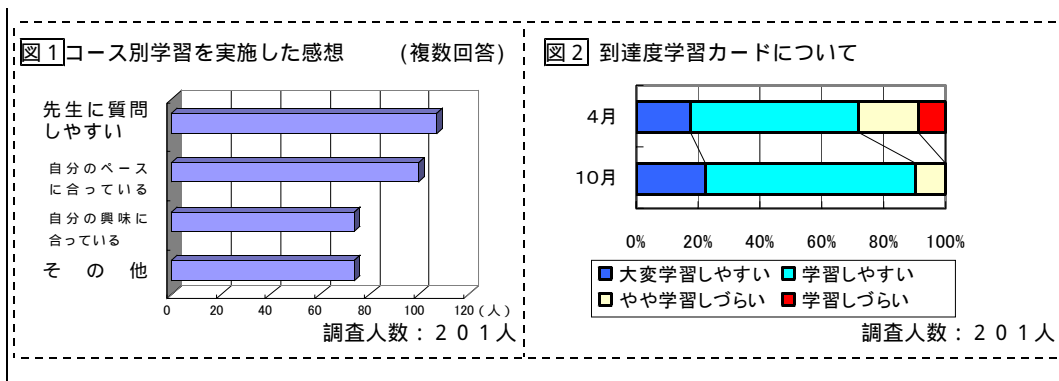
(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

<p>(1) 授業形態の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ コース別学習を行ったことにより、生徒の興味・関心に対応した学習活動が行いやすくなった。(図1参照)</li> <li>・ 習熟度別指導を行ったことにより、生徒の学習の進み具合への対応や基礎的・基本的な内容を重視した指導を行うことができた。(図1参照)</li> <li>・ コース選択時に到達度学習カードを使って自己評価を行うことにより、各自でコースを選択し意欲的に学習に取り組むことができた。</li> <li>・ 学習内容が分からないときに教師に質問したりするなど、意欲的に学習する習慣が身に付いてきた。(図1参照)</li> </ul> <p>(2) 基礎・基本の明確化と定着</p> <p>到達度学習カードを活用し、単元の評価規準を分かりやすく示したことにより、生徒が自分の到達度を知ることにより、自ら課題を見つけて学習に取り組めるようになった。(図2参照)</p>
---



## 2. 今後の課題

- (1) 補足的及び発展的な学習のための教材の開発を町の研究組織と協力して行い、その成果を普及する。(フロンティアティーチャーの活用)
- (2) 「授業形態の工夫」をさらに充実させるため、一斉指導やTT指導等の授業形態に合わせた指導法の工夫を研究する。
- (3) 到達度学習カードの活用法や生徒の学力の評価を生かした指導の改善を行う。

### 学力把握のための学校としての取組

- ・ 学習に対する意識調査の実施(5月, 10月, 2月)  
生徒の学習に対する情意的な変容を捉えるため年3回実施する。
- ・ 「学力診断のためのテスト」の実施と分析(5月)  
県で実施している「学力診断のためのテスト」から本校の生徒の実態を分析する。
- ・ 市販されている到達度診断のためのテストの実施と分析(2月)  
客観的な観点からの生徒の実態を把握するために実施。
- ・ 単元ごとの到達度確認テストの実施

### フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・ 地区協議会(研究発表, 公開授業, 研究協議)の実施(平成15年10月29日)
- ・ 補足的及び発展的な学習のための教材開発では町内の研究組織に協力を依頼し, 各中学校の実践事例を参考に研究を進め, その成果を公開授業を通して発表した。
- ・ ホームページによる研究成果の公開

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- |                      |            |     |            |       |
|----------------------|------------|-----|------------|-------|
| 【新規校・継続校】            | 15年度からの新規校 | レ   | 14年度からの継続校 |       |
| 【学校規模】               | 3学級以下      |     | 4～6学級      |       |
|                      | レ 7～9学級    |     | 10～12学級    |       |
|                      | 13～15学級    |     | 16学級以上     |       |
| 【指導体制】               | レ 少人数指導    |     | レ T・Tによる指導 |       |
|                      | その他        |     |            |       |
| 【研究教科】               | レ 国語       | 社会  | レ 数学       | 理科    |
|                      | レ 外国語      | 音楽  | 美術         | 技術・家庭 |
|                      | 保健体育       | その他 |            |       |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 |            | レ   | 有          | 無     |